

石クリ通信

12月号

今年最後のバスツアー

看護助手

柴田 さち子

毎年姉と一緒に日帰りバスツアーに3〜4回行ってきました。姉が病気になる、あまり乗り気ではなかったようなのですが、「家にいてばかり居てはダメ、一緒に行こう」と言われて連れて行きました。出かければ、みんなと話したり、色々な所を見学出来たりと、楽しい一日が過ごせました。ランチは成田ビューホテルでバイキングで、どれを食べてもおいしかったです。今年は何回かバスツアーを予約しましたが、いつも出かける前に姉が「行きたくない」とタダをこねてキャンセルになってしまい、残念だったので、今回は無理に連れて行きました。実際は姉もとても喜んでくれたのでよかったです。今年一年ありがとうございました。来年も皆様にとって良いお年でありますように。

病院にアートを

院長

石川 悟

先日NHKのテレビで、病院にアートを、という番組がありました。小児精神科病室の壁にアート作品を掲示することで、治療の役に立ったり、病室の戸棚の中にきれいな花束やかわいい人形がしまつてあり、利用者のうれしい驚きを誘う仕掛けなどが紹介されていました。エレベーターの場所の表示なども単なる文字の羅列ではなく、イラストなどでわかりやすく、楽しいような雰囲気にあふれている病院外来の例が出ていました。当院も少しですが絵や写真を飾って、殺風景で冷たい感じを少しでも払拭しようと努力して来ましたが、今回動くアート作品を展示してみました。ハワイ大学の芸術学科の学生がデザインしたものです。微妙に角度を変えた金属の板を回転させることで、光が輝き広がって行くように見え、目を楽しませてくれます。

衛星テレビで「駅ピアノ」という番組をご覧になっている方もいらっしゃると思います。外国の駅や空港に誰でも自由に弾けるピアノがあつて、数台のテレビカメラが演奏する様子を連続して記録、色々な人が色々な経緯でピアノの前に座り、演奏に没頭する様子を放映しています。クリニックの小さな待合室では無理ですが、日立市内でも、公共施設や駅にピアノなどを置いて、心なごむ空間に変える努力を少しでもしてもらえたら・と思います。



偶然のエンジョイ

事務

上野 亜希

先日、主人と笠間市の菊まつりに行ってきました。わざわざ菊まつりのために出向いたわけではなく、車検で水戸に車を出しに行くついでに「ふらっ」と笠間方面にドライブしていたところ、なにやら多くの歩行者に遭遇し、そちらに向かつて車を進めると駐車場誘導員の方があちこちから誘ってくるので、「ふっ」と駐車してしまいました。菊まつりの会場は稲荷神社でした。特に菊に興味もなかった私達夫婦でしたが、鳥居をくぐるとタイミングよく平安時代を思わせる装いをした少女たちが舞を披露しており、「これはバラスよくみごとな菊だなあ」と思うものにはやはり賞がついていたり、今までに見たこともない真つ平ら菊を目にして「えー！これ菊!？」と興奮したりと、思いがけず楽しい時間を過ごすことができました。菊を鑑賞し癒されるようになるとは、私も年をとったものだと感じる今日このごろでした。

2018年も残りわずか

事務

田所 弓佳

早いことに2018年もあと1ヶ月。12月は私の誕生日やクリスマスとイベントが残っていますが今年もいろいろあったなとふと思いました。初めての海外旅行で韓国に行きお肉ばかり食べたり、大阪旅行に行き大阪地震にあつたり、野外フェスに初めて参加したりと他にもいろいろと楽しいことがありました。年内もあと1ヶ月しかないですが、まだまだ楽しみたいと思います。来年もよろしく願っています。

またまた行ってきました

看護師

澤田 彰子

昨年に引き続き会津花火を見に行ってきました。昨年の失敗を教訓に高速を通つたので2時間ちよいで行けました。今回もミュージックスターマインや、エンディング花火は見応えがありました。今年は連休だったので、翌日磐梯山に登りましたが、前日までに降った雪で途中から足下が悪く大変でしたが、頂上から見た景色は「宝の山」と呼ばれるだけあつて猪苗代湖や、会津盆地、飯豊連峰まで360度見渡せて最高でした。

食欲ではなく芸術の秋

看護師

高山 早苗

先日、ポーラ美術館コレクションを見に行ってきました。モネ、ルノワールなど印象派の名品をはじめピカソ、マティスら20世紀絵画に至るまでフランス近代美術の魅力を十分に楽しんでました。日曜日とあつてたくさんの方が訪れており、美術館の周辺には雑貨やお菓子の店が建ち並び多くの人で賑わっていました。芸術の秋を楽しんだ1日でした。



世代交代

事務長

石川 都

今年も残すところあと僅かになった。疾風怒涛の日々と振り返つたのは昨年の今頃だった気がするが、今年も同じ結末を迎えそう、進歩のない自分に忸怩たる思いである。忙しくて落ち着かない・・・と言うよりは、加齢に伴う心身の衰えや集中力低下のため、こなせる仕事の量が落ち、疲れも取れにくくなったのかもしれない。そろそろ公私ともに身辺の断捨離、終活を始める時期のようだ。

人生九十年近い昨今、六十代なぞまだ若造だとも言われるが、これから残り何十年・・・などと思うだけで気が遠くなるし、初体験の「老いのプロセス」は着実に心身の内にあり、毎日が青息吐息である。もう半世紀も昔、銀座三越での琴の演奏会を聴きに來てくれた祖母は、当時の私には白髪を結い上げた渋い着物姿の完璧なお婆ちゃんだったが、今思うと現在の私の年齢と大して変わらない。

生物はその内部で刻々と生まれ変わり、まさに方丈記の、流れの中にかつ消えかつ結ぶうたかたにすぎない・・・と生の「動的平衡」を説いたのは、福岡伸一である。わが人生を振り返つても、自ら運命を切り開いて來たというよりは、想定外の「縁」の連続で、結婚し、日立の地に住み、孫までできた・・・というのが実感に近い。

ついこの間まで人間より小動物に近かつた孫も、今では片言で日英の言葉を操り、新米パパの間違いを正し、労わるまでになった。彼ら次世代の活躍に希望を託し、適当な時期に世代交代して、上手に生の舞台から退くことが、私たちに最後に残された最大の責務かもしれない。そんなことを考えながら、クリニック脇に建築中の次世代の家を眺めつつ、わが家の断捨離と、階下の隠居暮らしへの引越し計画を練っている今日この頃である。

最後にお知らせです。亡父石川光男の蔵書がまだかなり残っており、行先を探しています。仕事柄、市政・教育関係のものが多いたのですが、寄贈するほどでもないもので、クリニックの患者さんで欲しい方があれば差し上げたく、今年末までの期間限定で、待合室に石川光男蔵書を展示します。亡父光男をご存知だった方や内容に興味ある方などに、ご自由にお持ち帰り頂けましたら、私たちも嬉しく、亡父もさぞ喜ぶことと思います。どうぞよろしく願っています。